

第43回東海地区大学一般教育研究大会の報告

—— 惰性にひたればダメ教師、脱皮をはかればハメはず師 ——

稲賀 繁美

公務出張とは有り難い。二度の上京で足がでる、お寒い年間出張費、このせちがらき御時世に、公務となれば名古屋まで自腹も切らずただで行け、家庭奉仕も研究も、錦の御旗かかげれば、すべて堂々切り捨てて、行って来るぞと勇ましく、目指すは愛知学院大、朝からそれは大勢の風采上がらぬ背広連、われもわれもと詰め掛けた……のつけから恐縮だが、これだけの数の一般教育担当教官が一堂に集うには、いったいどういう集团的義務感と、ルーティン消化の受け身の姿勢と、煮え切らない問題意識とが必要か、あらためて反省させられた。

まず、分野別の分科会という運営形態が容易である。人文、社会、自然、外国語などという縦割りにすでに思考の硬直が露呈する。自分の分野を越えた広い視野にたち、大学教育全体のなかでどう一般教育を位置づけるか、その問題意識がこれではどこにも浮上してこない。小人数セミナーの全学的設定、全学出動による総合科目の有機的運営、外国語科目の目的再設定とそれに必要なカリキュラム上の措置、理系基礎科目の4-6年間一貫教育のなかでの再設定、といった、各大学がそれぞれ模索してきたはずの話題が、どこにも集約されない。

愚痴をこぼしても始まらないから、教養教育改革と名付けられた分科会に出席した。話題の絞り込みには不適切な設定で、各校の一般教育担当者が自分たちの窮状を訴える場面が多かったが、それだけにかえって積み残しの具体的な問題点が指摘され、例外的に熱気のもった会場となった。たとえば、こうい

った報告が飛び出すからだ。

多人数だからできる物理実験というのがある。それも文系むきだ。餡か小豆を用意して、学生ひとりに3つ宛てがう。凶弾ならぬ教壇から誰かにひとつぶつける。ぶつけられた学生は3つをあたりにぶつける。さあその先は飛び交う餡玉の連鎖反応だ。学生ひとりひとりをウラン原子核、餡玉を中性子とみたてての核分裂の模擬実験である。愛知大学は坂東昌子先生の教室風景で、連鎖反応が広がるには学生は500人ぐらいいと効果的だが、いかんせん餡玉の代金を実験費として計上できないのが悩みの種らしい。だが次には教室の前半分に学生諸君を「濃縮」させて、連鎖反応の臨界点を理解させ、さらにはその「実験」の報告を『日本物理学会誌』(vol. 47, No.3, 1992) にちゃっかり掲載される。研究と教育の、なんともうるわしき合体である。

この素粒子論の専門家、自称たいへんな「浮気もの」で、教養部のさまざまに専門の異なる先生方と交流しながら、文系むき一般教育の授業で次々の新種の発明を实践なさるのが楽しくてしかたないらしい。あまりに内部を掻き回したためか、ついには「モメたときは女を出せ」とかで教養部長にまで選出された(?)というのだから、タダものではない。総合科目のコーディネイターを頼まれると、すべての先生の講義に押しかけてヤジを飛ばす。煙たがられてもここは引き下げられない。ところが学生の私語を注意したのがきっかけで、講義中の先生と「私語の研究」で大論争。呆気にとられる学生たち。大学とは既製の知識が教壇から一方通行で能率的に「下賜」される場所ではない。それは具体

的な問題について、さまざまな考え方が衝突し文化が摩擦する、認識探求の熱い現場なのだ。そのことを学生は実地に納得してゆく。

とかく受け身に知識を暗記して単位をクリアしようとする消極的な学生たちの意識変革が最大の目標だ。とくに指名されて目立つことを嫌悪し、自らイニシアティブなど絶対取るまいとする頑な拒絶の姿勢は、もはや日本人的美徳といって済まされる段階ではない。それがすぐ異分子拒絶、外国人排斥の群衆心理へと直結するからだ。また友人どうし議論をして問題を掘り起こし、みずから体を動かし、必要な知識を獲得すべく計画を立案・実行し、汗をかいて調査し、その結果に立脚してみずからの判断を練り、ほかの学生の前で責任もって報告する訓練。大学専門課程にすすむまでに当然自覚されねばならないはずの、こうした問題解決実践の経験が、高校までの知識偏重教育では完全に欠落し、またいざ研究者となると、日本的徒弟制度のなかで、なし崩しのまま見過ごされたまま埋没する。

このように日本の教育において放置したままのさまざまな矛盾の板挟みにあっているのが一般教育だ。しかし被害者意識に萎縮しても空しい。むしろ高座型にも工房型にも教習所型にも還元できない一般教育の多面的な存在意義をそこに見いだして、これら3種類の機能を有機的に関連づけ、さらにそれを全学の教官相互の知的交流の場としても活用しよう、という贅沢な野心が必要だろう。既得権にしがみつくと保身がらみの事なかれ主義や、隣は何をする人ぞの孤高を気取った内弁慶からは脱皮しよう。教師たちの脱領域的な関心を、複数教官共同のゼミや総合科目での討論会といった全学的な規模の教育の場でぶつけあい、相互に刺激することが、結局は専門研究へのフィードバックとその活性化にもつながる。学部の壁を越えた共同研究の申請と

(寄せ集めにはとどまらぬ) 成果の質量こそ、専門学校を羅列ではない総合大学の、知的共同体としての自己評価の要となるはずだ。そしてその舞台として最も適切な基盤—拠点こそ全学の一般教育にほかならない。

そうした明るい展望を「教養教育改革の現状と課題」と題された分科会で示された坂東先生が、しかしこの国の国立大学にはあまりいないタイプの弁論活闘、自称ネアカ漫才おぼさんだったのもむべなるかな。日本の大学教師のタイプといえば、聴衆の反応にはまったく無頓着に、教壇に立ったまま大時代的で抽象的な舶来教育論にひとり悦にいられる良心的老教授。熾烈な対文部省交渉で疲れはて、なにが文部省に通用するかしないかをすべて見切ってしまったことの代償ですっかり教育行政専門官僚化してしまった逸材の中年教授。自分はえらいんだぞという感じの空疎なひとりよがりなおしゃべりの大音響がいに耳障りかまったく無自覚な中堅教師。若輩なのに無理に引っ張り出され、自校の一般教育改善の救いがたい停滞を被害者然として嘆いてみせる元秀才。いずれも聴衆に声が届かず、内容も全くの学生不在。普段の授業の単調で退屈な様子まで見透かせるようで、他人事ならず身につまされた。何がかれら一いや我ら、だが一をこうさせたのか。問題はむしろそこにある。今回の公務出張は、おもしろてやがて悲しき祭だった。

(人文学部・助教授)

